
悪のヒーロー

のんまさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪のヒーロー

【コード】

N2782W

【作者名】

のんまや

【あらすじ】

絶対に越えられない壁。どうしても彼と対等に立ちたい。僕は今から悪のヒーローになる。ぼくは勇者の邪魔をする。

プロローグ（前書き）

誤字脱字はごめんなさい。

プロローグ

僕はいつも1番になれなかった。

小学校の時クラスの人気者は彼だった。

ドッチボールだってサッカーだって野球だって彼が1番だった。

中学校の時クラスの人気者は同じく彼だった。

人当たりがよく成績は学年1位。先生の受けもよく女の子にも男の子にも好かれる。

高校の時やはり彼は人気者だった。

サッカー部に所属し1年生でエース、成績は優秀で大抵学年1位。

彼の周りに周りに輪ができ、女の子にはよくモテる。変な噂は全く聞かない。

大学生の時彼は有名人だった。

大学の中で名前を知らない者はいない。女の子にモテるため恨みをかうようになった。

たびたび肩に刺青が入っているような人たちが至る所にピアスが付いている人に襲われた。

でも彼は強かった。誰も彼が喧嘩をしたところを見たことがなかったから想像できなかったのだろう、ずば抜けていた。

彼は完璧だった。本当に完璧だ。それは今でも……。

僕は彼に嫉妬した。妬んだ。恨んだ。彼の才能を欲した。

なんで僕じゃないんだ。なんで彼なんだ。僕だって人気者になりたい。頭がよくなりたい。モテたい。彼にも勝る才能が欲しい。

みんな僕を見てくれない。目の上のたんこぶどころか目の上に岩があるようだ。

・・・僕だってヒーローになりたい。

だから僕は悪のヒーローになることにした

「そろそろやめにしようぜ。こんなのとっちにも得しないじゃないか」

俺の目の前にいる奴が余裕な顔をして問いかける。
そんな彼とは対称にぼろぼろの俺。

「お前が得しないならそれだけで俺は得してるんだよ」

俺の前にいる奴の名前は木村 正明（きむら まさあき）。
歳は25歳。

職業は高校教師。

彼女はいいはず。

彼は生まれながらの人気者、才能ある人、そしてヒーローだ。
まず彼は嫌われることの方が少ない。

そして俺の永遠のライバル。

つまり光当たる者。表にいるべき者。そして正義のヒーロー。

俺が正明をこっち側の世界に巻き込んだ。故意的に。恣意的に。しかしそれは必然的だった。

簡単なことだ。

それは彼は常に僕の、俺の前にいたから。

彼は強い。僕は弱い。

しかし俺なら強い。

完璧に仕留めた……つもりだった。

「心を入れ替えることはなさそうだな。じゃあ俺はお前を殺す。お前の分まで生きてやるよ」

そういつて正明は銃を俺に向けた。

負けたくなかっただけなのに。

これからだっというのに。

こいつを殺してこれからだっというのに！

しかしまあこの状況下ではそんなこと言ってられない。

俺の、いや僕の物語もここまでかもな。

よく考えれば僕の物語は勝手な妄想から始まった駄々っ子のような物語なのかもしれないな。

ああなんで俺こんなぼろぼろなんだ？また負けるのか？死ぬのか？くっそ！どこで俺は間違えたんだ！

一体どこで。

遡って高校生の頃。俺がまだぼくだった頃の事だ。
ぼくは正明と同級生だった。

ぼくは正明が嫌いだ。
常に誰かに囲まれて、常に誰かに頼られて、だから正明が嫌いだ。
ぼくらは正明の付属品でしかないように思えて、
ぼくはクラスで、学年で、いや学校で彼と関わろうと思わなかった。
ささやかなこの時できる反抗。

だからぼくは孤立した。人気者になりたかったぼくは、違う意味で
人気者になった。

彼は表の人気者。

ぼくは裏の人気者。

気分がよかった。陰湿ないじめを受けてぼくは気分が良かった。
みんなぼくを見てくれる。どんな状況でもぼくはみんなの中でこれ
ほどにも大きく存在してる。

7

「おい、こいつ殴られて笑ってるぜ」

「ちっ気にくわねんだよ！」

ぼっっ

そんなこと思っているぼくは絶賛殴られ中だった。

殴っている相手は、正明のいつも隣にいる森本大和と……誰だっ
け？

確か川・・・上くん？だったっけ。

いじめの理由・・・正明の友達じゃないから。

そりゃそうだよな。学校でぼくだけが正明と仲良くしてないんだもの。

でもぼくは正明と最初っから仲が悪いわけじゃないんだ。

でもそんなことは彼らには関係ない。

ただそんな理由をつけて弱い者いじめをしたいただけなんだ。

そうじゃないと自分の存在が分からなくなるから。

自分は強いんだ、って自己暗示をかけるために。

ようするに彼らも正明といると自分が付属品のようにしか感じなくなるのだろう。

「わかるよ、君たちの気持ち。ぼくにはわかる。みんなと話しているはずなのに実は違うんだよな。君らはただの合いの手。正明がただ一人でスピーチをしてるだけ。そうだろう」

「わかったような口きいてんじゃねえよ！」

ドスッ

ぐっ次は腹か。

息が詰まる。苦しい。

ああ、ぼくはまだ生きているんだ。

「何やってんだ！おいっ」

「やべっ行くぞ！」

遠くから聞こえる誰かの声に反応して二人は逃げていく。

ああぼくの快樂の場が逃げていく。

「おい大丈夫か？」

黒髪の癖っ毛。

かわいらしいと表現した方がいいような顔。
華奢な体。

こいつは・・・見覚えがない。
誰だ？

「君は・・・？」

「？なにを言っているんだ。同じクラスの山下やましたたつみだよ」

山下・・・？

いたっけそんな奴？

「もしかして覚えてないの？」

「・・・ごめん」

「昨年転校してきて海君の隣だったじゃん」

海君。

ぼくの名前。本名は阿久戸海あくとかい。

無駄に格好いい・・・ような気がするのがちょっと嬉しいやら悔しいやら。

名前だけが目立ってしまったようで。

だいたい親も『海』には心が広く、顔も広く、人とのつながりは深く、神秘に包まれ、美しく、強く、世界の基礎となる人になって欲しいって意味があるのよ」なんて言うけれど、名前だけ。

現実のぼくは常に陰。

ぼくは名前が羨ましいよ。

閑話休題。

そついやこいつと一時期仲良くしたこともあったかも。

「悪い悪い冗談だよ」

嘘です。

冗談抜きで忘れてました。

「わかってるよ。いつもの冗談だろ」

いつもの嘘です。

「そうだよ、晁」

「うん。晁な」

そうだった。晁だった。

「で、何しに来た」

「何しに来たって・・・海君が・・・」

晁はいじめられてたからって言いたいのだろうがためらう。

「海君は・・・なんで正明君を嫌ってるの？」

「そんなのわかりきっているだろう」

理由を聞いたって納得はしないだろう。

ぼくの考えは誰も理解できない。だからぼくは一人なのだ。

だからみんなぼくをいじめる。

でもさっきの奴らは仲間になれそうだったな。

「ぼくは海君と友達だと思っているよ。だから海君が困った時はぼくに言つて。ぼくは友達なんだから」

晁がぼくの肩を掴んで声を荒げて言う。

友達？ぼくの友達？

ならぼくの計画に乗ってくれる？

ぼくと一緒に悪に徹しようと思える？

無理だろう。君は表の人間だ。君はぼくの友達になれない。

「君は悪にはなれない」

「え？」

晁は心底驚いたようだった。

「正明は正義にしかなれない。ぼくは正義にはなれない。君は悪になれるのかい？」

「……」

「ぼくと友達になるっていうことはそういうことだから」

ぼくは立ちあがって歩く。

ぼくは悪に徹する。そう決めた。

今は無理だけどいつか正明をぎゃふんと言わせてやる。

そのためには今は我慢だ。

青春を謳歌している場合じゃない。

ぼくの青春はまだだ。

ぼくの青春は正明と対決する時、正明に勝つ時だ。

勝つためにもぼくはこれから強くなる。

ぼくはこれから俺となる。

「なれるよ」

ふと振り返ると晁が立ち上がり見たことのないような怖い、怖い、強い顔でいた。

「え？」

「ぼくは悪になれるよ。海君が思っているよりずっとぼくはもう悪なんだ」

「もっ？」

「ぼくはだから海君と友達になれると思ったんだ」

晁はぼくそ笑んだ。というより意味深に笑った。

晁の目は氷のように、いやそれ以上に冷たかった。

「で、具体的になににするの?」

晁とは学校で話そうと思っただけど、居心地が非常に悪い。理由?聞かないでくれ。

というわけでぼくらは近くのファミレスにいる。

話す内容?

無論、一発正明をぎゃふんと言わせる。

とはいったもののガラスから流れる水のようにアイディアは出てこない。

それどころかどのようにすれば良いかさえ分からない。

なんて黙りこくっていたら晁がぼくに聞いてきたけども・・・うーんなにをすべきなんだ?

「く、靴隠すとか・・・?」

「全員が敵の状況下でそれはどうよ」
うっ、確かに。

はて、どうやって見返したものか・・・

「彼のプロフィールを作って苦手なもの、不得意なものとかを調べたらどうだろうか」

思い付きだった。

恐る恐る晁を見ると満面の笑み。

逆に怖い。

「いいねえ。じゃあ、まずは正明君の行動パターンを調べて、苦手なもの好きなもの、得意なものとか不得意なものとか調べようよ」
そして凄く乗ってきた。

いったいなぜ晁はぼくと悪に徹することにしたのだろうか。

ぼくはそれがとても疑問だ。理由は聞いてない。

あの時、目が怖かった。目が冷たかった。晁があんな目をするのを見たことがない。ぼくはこいつを信用していいのだろうか。正明の手下だったりしないだろうか。

でも今は騙されても晁のことを利用しようと思った。

そんなこと考えているうちになんやら晁が一人で喋り続けていた。「っじゃ、明日から調べてみるか」

まったく話を聞いていなかったぼくは適当に流し今日は帰ることにした。

しょうがないじゃないか。ぼくらはそんなに仲が良くない。

一人で歩いていると公園から罵声と笑い声とうめき声が聞こえた。喧嘩か。むしろリンチ。袋叩き。

まあぼくには関係ない。でも反射的に見てしまった。

うちの制服を着ているのが二人。

ぼくは知っている。あれは森本とえつと・・・川・・・上だ。ざまあみる。苦しむんだな。

ぼくは悪だ。見て見ぬふりをするのでぼくは一步踏み出した気がした。

この罪悪感が悪か。ああ笑えてくる。

でもぼくは気づいた。彼ら二人と目が合っていることをやめろよ。

そんな眼で見るなよ。

この罪悪感が心地よいはずの罪悪感が、だんだんと苦しくなってい

く。

懇願する眼。

いじめている時と全く正反対の眼。

ぼくに向けられることのないと思われた眼。

ぼくは悪のヒーローになるんだ。

ぼくは見て見ぬふりをする。

・・・でも

それ以前にぼくは正義のヒーローになりたかった。

チャンスじゃないか・・・。

正明はここにいない。

・・・でも

ぼくは悪のヒーローになりたい。

正明をぎゃふんと言わせたい。

ぼくは走っていた。リンチをしてる奴らに。

ぼくはまだ悪に徹せてない。

弱いなあぼくは。

その前に目の前の奴らを片づけるか。

なあ俺よ。お前の番だぜ。

相手は5人だ。お前ならやれるだろう。

とまあ任されましたけども・・・またこの状況か。

俺の出番。うん。これは間違いない。

でもかなり不服。

引き返そうかと思っただけだけどそれは無理だわ・・・。

うん。

今一人笑っていた奴をぶっ飛ばした。

そして俺の目の前で白目をむいている。

考えるよりも先に手が出てしまったか。

はあ。

「ああ？てめえ？」

なんか一人ぶっ飛ばしたせいか思いつきりガンつけてくるんだけど。

金髪。長身。耳にピアスをつけていて、体は・・・そんなに筋肉はない。

ナイフを持ってそうだな。いや持つてるか。

じゃあ先手必勝！！

ぼっ

思いつきり鼻っ柱ぶん殴ってやった。

殴られた本人はとめどなく流れる血と涙に慌てている。

気絶したふりでもすりゃいいのに・・・

なので、

ぼっ

鳩尾を思いつき蹴った。

「くっはっつっつ」

声にならない叫び。ああ気持ちがいい。この音が良い。こいつ顔面、血と涙と涎でぐちゃぐちゃだな。うん。汚い。

「なっ」

他の奴が絶句してんな、なんか楽しいな。

あと3人か。

笑みがこぼれる。その後ずさるなよ。

「ひっ」

一人が逃げる。続いて逃げ始める。

あゝいいとこだったのに。

うん。今日は気分が乗らないからいいか。

さて、問題はこっちか・・・。

「森本君と川上君大丈夫かい？」

満面の笑みで聞いたみた。

「だ、大丈夫です」

声裏返ってんぞ・・・。

惨めだ。ざまあみろだ。

いいことを思いついた。俺頭いい。うん。そうしよう。

「なあ、お前ら俺に助けられたな」

ふふふ。いい機会だ。こいつらも利用しよう。

あいつを倒すために利用できるものは利用してやるっ。

「俺と一つ楽しいことをしないか？」

翌日、あの公園の次の日の朝。

「海君、今日正明を追跡しよう」

廊下を歩いていると晁が話しかけてきた。

晁は昨日のことを知らないのだろう。いつもの調子で聞いてくる。

「そうだな。今日からやろうか」

遠くにいる正明を見る。いつも通りみんなに囲まれている。

隣にはガーゼや痣に顔を覆われた森本と川・上がいる。

目が合うと一瞬ぎよっとした感じの顔になり、次にすまなそうな顔に変化した。

「昨日のこともあるからいろいろあるから動きやすいしな・・・」

「ん？何のこと？」

「いや、なんでもない」

「ふうん、まあいやそれよりも海君、昨日あることを調べていたら気になる話を見つけたよ」

「ん？なんだ？」

「解離性同一性障害について」

血の気が引くのがわかった。

「簡単に言っちゃうと多重人格だよ。いやちよつと違うか・・・まあそんなことはどうでもいいんだよ。多重人格がどんな症状かは知ってるよね。普通の二重人格の人はもう一人の状態になる時記憶がないらしい。だから発見に遅れたりするんだって。でね、ぼくが興味を持ったのはそこじゃないんだ。いやそこなのかな。原因はともあれ、その二重人格を制御、うーん・・・言葉が違うかな・・・共有？まあいいすればその人は凄いでなんじゃないかな。ジキル博士は失敗してバットエンドだった。でも実際というか・・・モデルはウィリアム・ブロディーでしょ。彼みたいに隠れて二重生活をうまく送れ

る人もいる。まあ彼は多重人格じゃないけど。そう考えるとあまり成功している人はいないな。ビリー・ミリガンだつてシビルだつて成功はしてないか……。あつて何を言いたいかというとな、ぼくの知っているある人がそれを自覚し、しかも記憶を共有し、しかももう一方の人格と仲がいい。どう思う、海君？」

・・・ナニヲイッテイル。

ぼくはなにも知らない。

・・・ナンノコトヲイッテイル。

ぼくになんでふる。

・・・ナンデソノコトヲシラベタ。

どう思うつて・・・もしかして晁はぼくのことを言っているのか
血の気が凄い勢いで引いていく。脈が速い。冷や汗つて本当に出るんだ。

「どうしたの？具合でも悪い？」

晁の笑顔が嫌な笑顔にしか見えない。

「いや、そいつもいろいろと苦労してるなあつて」

「そいつはどうもそのことには慣れてるようだよ。ぼくはなんか苦労しているようには見えないけどね」

「そ、そうなのか・・・それもそうなのかなあ」

声が上がっているのがわかる。言っていることもめっちゃくちゃなこともわかる。

とりあえずここは退散だ。

「ま、まあ今日はここで。じゃ、じゃあまた放課後な」

逃げた。このままあそこにいたらだめだ。まずいことになる。直感だがまずいことになる気がした。

その日の昼休み。

机に突っ伏していると人影を感じた。

から見上げた。

森本と川・・・上だった。

二人は気まずそうな、悔しそうな、また怖がっているような顔で立っていた。

「ちよつといいかな・・・」

海君はぼくのこと覚えてなかったけどぼくは海君のことを覚えていた。

いや違う。知っていたというべきなのか。忘れたことがないというべきなのか。

彼に忘れられたとかは別にしておぼくはずっと知り合いだ。知り合いだっていうのも違う。

難しい……。

でもぼくは海君のことを知っている。

誰よりも詳しく。

海君は強いつても海君は頭も良いつても知っている。

ぼくは海君が普通の人じゃないことも知っている。

ぼくはずっと見てきたんだ。

転校して一ヶ月くらいたった頃、ぼくは繁華街から逸れた公園でかつあげされかけていた。

そこにある一人の男の子が跳んできた。文字通り右から左へドロップキックでドーンと。

そのまま流れるような攻撃で一気に三人ほど蹴散らした。

ぼくはそんな彼が格好いいと思った。調べたいと思った。自分の駒にしたいと思った。

よく見ると彼は同じ制服だった。名前を聞こうと思ったけどその前に彼は俺には時間がどうか、俺にはもう一人のなんとかがどうか言って逃げるようになくなってしまった。

ぼくもどうせ同じ学校なんだし明日調べればいいかと気にしなかった。

だから次の日学校について席に着いた時驚いた。

彼はぼくの隣だった。

名前は阿久戸海君。

あまりぱつとしない雰囲気を出していてクラスの中心から一步引いているそんな感じは見てとれた。

この頃はまだいじめとかはなく、「なんだあいつ」程度にしか思われていなかった。

クラスのみんなに聞いてもあまり存在すら知っている人があまりいなかった。

だからみんな友達の木村正明君という人に聞いた。クラスの中心でみんなの太陽に聞いてみたんだ。

もちろん彼に聞く事は近くににいる人にも問う事になる。

そこには森本君と川下君がいた。

ちなみに海君は今でも川下君のことを川上君と間違えている。たぶんわざとだろう・・・

彼らは海君のことを改めて認識するようになってしまった。

「なあ、あくちゃんよー。俺らとお友達にならない？」

彼らは海君と絡もうとした。善意なんてこれっぽちもない。いやな雰囲気しかない。

クラスのみんなは黙認した。正明君でさえも。

ここで正明君が「やめろ」と言えばそれで終わったのかもしれない。でも彼は言わなかった。恐れるものが何もないのに。彼は彼の判断で黙認した。

それから彼らは海君をいじめるようになった。

だけどぼくは見たんだ。

海君は強い。海君は凄く強い。

なのにあの時の海君と今の海君はまるで人が違う。

もしかして海君は、海君の中には海君が二人いるんじゃないか。

ぼくは二重人格に着目した。ジキル博士とハイド氏の奇妙な物語のように。

浅知恵だった。

でももしかしてと思って試そうと思った。だからそのために友達になる必要があった。

席が隣だから話しかけて、席が隣だから昼ご飯と一緒に食べて、なんとか友達になろうと思った。

学年が上がって、クラスが一緒になりそろそろだと思った。

なのに海君はぼくを覚えてなかった。シヨック大きい。

でも話がうまい具合に進みいい感じになった。有終の美。

ぼくは駒を色々使って手筈を整えた。

あとはぼくが確認するだけだ。

「今別れた。そっちに向かっているはず。やれ」

案の定海君は見事に中身が変わったように殴りに行った。

森本君と川下君のところに。

彼らをぼくの駒が呼び出し、タイミングを見計らって殴る。蹴る。

弱ったところに海君が飛び込む。

完璧。作戦通り。もうブリリアント。

確認はした。あとはカマをかけるだけだ。

だからあえて海君の前で二重人格の話をした。

目を見ればわかる。海君は動揺した。ぼくは海君のことなんて一言

も言っていないよ。

確信に変わった。

浅知恵はまさかの的中だった。まあ、まさかではないが……。

海君。君はぼくのいい駒になりそうだよ。

世界はぼくを中心に回ってる。

「昨日はあれだな・・・どうも・・・な」

屋上に来てくれという事だから森本と川上と三人で屋上にいる。

屋上には初めて来たけれど、こうなんていうか漫画や本に出てくるような華やかさはなく、それでもって漫画や本に出てくるような恐ろしい場所でもない。

殺風景。

花壇もなくただただフェンスがあるだけ。拍子抜け。

もっと面白いところじゃないのか普通。屋上は野球部が練習してますとか、園芸部がやってますとか不良の溜まり場で煙草の吸い殻が落ちてるとか、落書きがあるとかないのか。

いや待てよ、ぼくは今そういう状況なのか？いやいやめんどくさいなあ。また俺の出番かもね。

そうぼくは今屋上に来てテンションが上がっている。なぜかはわからない。こういうことってよくあるでしょう。修学旅行だやっほーいとか、夏だ海だ水着だやっほーいとか、明日学校休みだってさやっほーい、みたいな。そういうノリ。屋上だぜやっほーい。みたいな。アスファルトが冷たい。心地よい。

「でな、聞きたいことがいくつもあるんだが・・・いやそんなたいそうなことじゃなくてさ・・・いいかな？」

恐る恐る聞く森本。その隣に川上。

「良いけど・・・そんなに答えることができないと思うけど・・・」

「教えてほしいんだけど・・・お前ってなんか武道でもやってんのか？」

「・・・」

「なんであんなに強いんだ？俺はあんなに強い奴は初めて見たよ」いきなりぼくの核心につく質問か・・・

見られたからには教えるべきかもしれない。口封じのために教える

べきなのだろう。

「じゃあ最初にこのことを言っておくよ。ぼくは、ぼくの中にはもう一人のぼくがいる。ぼくは俗に言う二重人格なんだ」
これいうと引かれちゃうんだよな・・・

恐る恐る森本と川上の顔を見る。どうせすっごいドン引きの顔を拝まなければいけないのだろう。

ん？あれ？意外や意外「？」って顔をしているな。

さてはこいつら状況が飲み込めてないな。もしくは真性の馬鹿か。

「二重人格ってなんだ？」

「よくわかんないけどなんか凄いいんじゃね」

真性の馬鹿だった。

「二重人格っていうのは簡単に言うと一つの体に二つの心がある感じかな」

「ふーん」

真性の馬鹿はこの説明でもわからないのかな。いやいやただの相槌だよ。きつと。たぶん。おそらく・・・うん。

「でな普通のぼくはあまり強気になれないとかあまり強くないとか普通は弱い。でもってもう一人の俺はぼくが言うのもなんだがかなり強い。ぼくは一応昔から色々と武道に手を出してきた。正明君とは比べ物になれないがぼくはこう見えても飲み込みが早い。

運動神経もいい。それは自分でも言える。自慢もできる。誇ってもいいぼくの能力だ。おかげで俺の方はボクシング、合気道、柔道、剣道、フェンシング、空手、テコンドー、フェアバーン・システムキックボクシング、ブラジリアン柔術、中にはちょっとばかり危険なサンボ、システム、クラヴマガなどいろんなものに手を出してきた。おかげで喧嘩は負けなしさ。でも手加減は大変だぜ。下手したら殺しちゃうような武術にまで手を出しているからな」

これには目の前の馬鹿達は引いていた。そりゃな。いままでいじめていた弱そうな奴がまさかのまさか。

まあこの反応は期待通り。

「だから強いんだよ。それで他には？」

「あつああ、なんで俺らを助けた？」

「無論困っていたから。っていうのは建前かな。利用できるから。これが本音」

「・・・」

「あー。嘘嘘。ぼくにもよくわかんない・・・はい次の質問は？」

「そうだな・・・昨日の、あの約束は本当か？というか本気か？」

昨日の約束。この俺が一方的に押しつけた約束。

「本気だよ。君らはぼくの仲間だ。似ているんだよ考え方が。正明のことをあまりよく思っていない。そうだろう。じゃあその約束はぼくにとっても君達にとってもいい案じゃないか。何を迷ってんだ。君らはぼくに従う。ぼくは君らを良いように使う。それ以上はいいんじゃないか？」

「確かにそうだが・・・」

「じゃあもうすぐチャイムも鳴っちゃうしぼくは帰るよ」

ドアの裏に晁がいた事はこの時誰も知らなかった。

「さあ海君、尾行するぞ」

放課後真つ先にぼくの席にそんなこと言いながら近づいてきたのは無論晁だった。

その顔満面の笑み。今から遊びに行こうぜみたい。晁からしてみれば遊びなのかもしれない。というぼくもなかなか楽しみ。本格的に正明を出し抜くことを考えるととても楽しい。こういう気分になるとなんか本当に自分が悪い奴に思えてくる。それも気分を上げる要因の一つになっているのだが。

でもこう晁はぼくに、嫌われているぼくに話しかけて大丈夫なのか。それはいつも気になる。晁まで嫌われてしまったらぼくはなんていうか・・・申し訳ない。

周りを見る。周りのみんなはこっちには目もくれない。それどころぼくらだけ違う世界のような。

面白いな。よくよく見ると大体四つの種族に分かれるみたいだ。

? 誰とも話さず帰る準備をしている人

? 友達と雑談している人

? 部活動に行く人

? カップルでいちゃいちゃしてる人

? はぼくみたいなタイプだ。?? は青春を謳歌してるんだな。?

は・・・けっ。

あんまり人間観察というものはしたことがないけどこのくらいはできた。

でもって正明はといえば? 部活動に行く人に属すみたいだ。

「なあ正明は部活動に行くみたいだけどうちの部活って終わるの? 0時だよ。どうすんの?」

「どうすんのかって、待つに決まってんじゃない」

「待つのか!」

「いや待つ以外に何があんのさ」
待つのか……。確かにそうでもしないとあいつの素性わかんない
しな。とはいえ晁には言っていないけれど俺はそんな知らないわけで
もないんだよな。

「で、どうしようか？」

「どうしようって待つんだろ？」

「うん。だから何して待とう……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……しりとりでもするか」

「そだね」

「しりとり」

「りんご」

「ごりら」

「ラーゲリ」

「ラーゲリ！？なにそれ？」

「ソ連の強制収容所」

「ああそうか、そうなのか？……えっとリール」

「ルール」

あとは長くなるので省略。薄暗い教室でしりとりをする二人。なん
とも悲しい。

そんな中なかなか盛り上げを見せたしりとりだったが、みんなも二
人でやればわかるが途中からグダル。でもって一回で終了となった。
そのしりとりの暇つぶし時間1時間。頑張った方だ。時間はという
と4時半。まだ3時間半もある。なのにしりとりのおかげで空気が
死んでる。そりやどちらも口数は少ない方だからね。
ぼくも挫折したよ。この空気やだよ。

なので呼びました。森本君と川上君。

「で用って何？」

あからさまに嫌そうな顔。電話した時、もう家だったみたいだしごめんね。まあこれっぽちも悪いと思っていけないが。だってぼく悪魔だもの。

「つまんない」

「「は？」」

「なんか面白い事して」

「「はああ!？」」

すっごい無茶振り。さあ彼らは何をしてくれるのか。

「いやこういう場合はみんなでゲームしようぜ」

「みんなで遊べるやつやろうぜ」

前から思っていたのだが川上君はどうも森本君の金魚のフンみたいだ。あんまり自分からの発言を聞いたことがない。

この際だから森本君と川上君の容姿についてちよつと話をしようと思う。というか説明?暇なので。

森本君の方は完璧ヤンキーみたいな感じ。金髪で髪は肩まである。

耳にはピアス。きりつとした目。決して不細工ではないがどこにもいそうな感じ。身長は175cmくらいかな。大きくはない。色は肌色というよりなんというか小麦色。

川上君は森本君の対照的で黒髪で短髪。スラーっとしていて身長もそこそこ大きい。線が細いというかなんか剣道が似合いそうな感じ。簡単に言うと二人とも特に漫画のキャラみたいな面白い特徴は全くない。金髪がまだいい方だ。

要するに凡人なのだ。ふう。

閑話休題。

そんな彼らはとんでもないこといいやがった。

「しりとりとかでもしようぜ」

冗談でも許さないぞ。おい。

結局僕ら4人は机を向かい合わせて1か月後に控える定期テストの

勉強をしていた。なんとも偉い4人組だ。ぼくらの学校は一応私立の進学校だから定期テストは絶対に落とせない。こう見えて意外にこの学校は偏差値は高い。なのでヤンキーといえども勉強しないといけないのだ。

しかし教室で嫌われ者と目立たない男とヤンキー2人の勉強というのはおかしいものなのかもしれない。教室を通りがかる先生、生徒みんな二度見してきた。笑える。

こう勉強会してみると森本君も川上君と晁は決して馬鹿ではなかった。

晁は文系が得意。森本君は数学は話を聞くところによると学年13位。川上君は帰国子女だという。人はみかけによらないものだなあ。

でそんな事しているうちにあっという間に20時になった。

「ちょっと待て。お前ら正明をつけるためにこんな時間までいたのか」

森本君はかなりびっくりしていたようだ。それは川上君も同様なだろう。口が見事に、ぼかんという擬音が当てはまるようにあいている。

「そうだが・・・お前らも来るか？」

「いやいや待て待て。俺らは別にやらねえぞ。敵対しているわけでもないし・・・」

「でも正明君のこと好きではないでしょう」

といったのは晁。不覚にも久しぶりのセリフだったのでびっくりしてしまった。こいつ影薄いなあ・・・。

「いや、嫌いというか・・・」

「嫌いというか、気に食わない。常に自分の前にいて目の上のたんこぶ。女の子も全部持ってかれて、気に食わない。できればぎゃふんと言わせたい。でも仲悪くなるのはいやだ。だろ？」

「うっ」

「じゃあこうしないか・・・ぼくらと行動してあいつの弱みを握る。でもって心の中で彼より優位にたつ。いい案じゃないか？」

晁って時々悪魔に見えるよ。

「そう簡単に言われてもな・・・」

まったく優柔不断な奴らだ。しょうがない。

「おいてめえらグチグチ言わずに来るのか来ないのかはつきりしろ！」

俺になって怒鳴った。晁にはあんまりこのことを知られたくはないのだが薄々感ずいてるようだし一瞬だったらいいかと思っただけ切っただけだ。

「はい！わかりました！私共誠心誠意ついていかせていただきますま

す」

効果ありだった。晁はというとぼくの方見てにやけてる。だから怖いよその顔。

という事で4人での尾行となった。

暑苦しい。というか気づかれるだろこの状況。

どういふ状況かというと電信柱の後ろに隠れて尾行するという刑事ドラマにありそうな状況だ。といっても刑事ドラマで電信柱に4人の野郎が隠れるなんて見たことがない。

正明はというと耳にイヤホンを突っ込んでいるからか気づいていない。いくら天才といえども気づくことはないのか。なんせこの平和ボケしたご時世だからな。

とまあ最後まで追跡をしたのだが、何の面白味もなかったただ収穫は疲労と時間つぶしだけだった。

正明の家はいつも通り一軒家でなんの特徴もない。なにか特徴があるだろうと言われればそうだなあ・・・白で統一されているため外装がおしゃれに見えることくらいかもしれない。

「で、こんなことして楽しいのかよ」

終わってみてまず言葉を発したのは森本だった。

「なにか文句でも？」

ぼくは俺になつてから優しく問い返してみた。

「なんでもないです。めっちゃ楽しかったです。いい経験になりました。また一步大人になれた気がします。全ては阿久戸様のお陰です」

楽しかったそうです。感謝までされちゃいました。

「そういえばいつから海君と森本君は主従関係がぎやくになつていくの？」

そういえば晁に言っていなかった。ここで昨日のことというと必然的にもう一人の存在を暴露することになる。それは今は避けたい。困

ったものだ。ぼくは森本達に目配せをした。彼らは気づいてくれたようだ。目が合うとおびえた顔をするのはやめてもらいたいものだが・・

「あー・・ほら、この間先生にいじめてたのばれちゃってよ・・だからそのなんだ、ほら、あれだよ。お詫びも込めて・・こう主従関係を逆転させたわけだよ。俺らなりに考えてな・・」

「ふーん、そうなんだ」

なんとかわかってくれたよう・・だ？顔がにやけてる。

晁にはちゃんと言った方がいいのかもしれないけれど言いづらい内容だし、信用できないだろうと思っ黙っている。彼らと違って晁はまだ見ていない。だからまだ言わない。

「で、これからどうする？」

川上君いたんだあ。まったくしゃべらないから帰ったかと思ったよ。

「聞こえてる聞こえてる」

心の声は自然と口を動かしていたらしい。おかげで目の前で川上君はリアルにシヨックを受けていた。

「じゃあ今日はここで解散にしようか」

「ファミレスにでも寄らね？」

提案してきた森本君。どこまで不良少年だ君は。今何時だと思っっている。今11時だぞ。

「いいいね」「」

川上君に晁まで・・。

結局ぼくも流され帰宅は夜中の2時を回った頃だった。

尾行すること一カ月。ぼくらはそこその情報を集めることに成功した。

朝から晩まで調べたのも大きかったけど、なにより森本君と川上君の情報も大きかった。もともと、もともともないが彼らは正明と友達なわけだから当然最初っから聞くべきだった。しかしぼくらがそのことに気付いたのはつい三日前、森本君が言った言葉だった。「ていうか尾行してどうすんの？」

この説明は初日にしたはずなのでぼくらはあきれて同じ説明をしたわけだが、彼はまるで初めて聞いたかのように驚き、そして問題の発言をした。

「正明のことを調べてるなら俺らに聞けばいいのに・・・」
ぼくの苦労を返してくれ。同じく晁もうなだれているかと思ったらそうでもなく笑っていた。しかも終いには「海君気づいてなかったの？」などとふざけたこと言いぼくはますますシヨックを受けることになった。

そんなこともあって今手元にある情報をまとめると正明はあんこととはちみつと梅干しがが嫌いだそうだ。だからどうした。ほんとに骨折り損のなんとやら。

実のところ他にも情報はあるのだが、どれをとっても超人的な奴だった。

欠点が見当たらない。

出し抜こうにも想像には不可能の字が浮かび上がる。
こんな高校生がいていいのかという事からもしかしたらダブってんじゃないか疑惑浮上。それも4年ほど。その時点で馬鹿なのでありえないのだが・・・それにそんなことは絶対に無い。
なぜならぼくと正明は小学校からずっと一緒だから。

そして何も弱みを握れずぼくらは高校を卒業することになった。
このぼくらの活動した約2年間。ここでなにか掴めたならばぼくらは、
ぼくらの未来は変わったのかもしれない。

額に向けられた銃。もうおしまいか。まだ終わりたいくない。こんなときに懐かしいこと思い出してる場合じゃねえな・・・。

周りを見渡す。転がる二つの体。10m先に俺の拳銃。その右に2mほどに大型ナイフ。

そしてぼくの周りには何も武器になるようなものはない。思い出す高校時代。

よく考えればまだ高校の時は遊びの延長だったな。正明の素性調べて、たまに変な奴に絡まれて、森本と川下を利用して、晁と遊んで楽しかった青春の1ページじゃないか。

なんか・・・友達だったな。あの時、あの瞬間。

いやいや待って待て。ここであきらめてどうする。

なにか打開策を。何か一発逆転のものがほしい。ああ神様俺に超能力を。しよばいのでいいから。相手の視界を一瞬奪うとか、相手の力が一瞬抜けるでいいからなにか！なにかほしい。

「ちくつしよーーーーー」

叫んだ。もしかしたら吹っ飛ばかなあなんて思ったんだけどそんなことはなし。

でもその時、

「そこまでだ！」

二丁の拳銃を持った全身黒い男が銃を向けていた。

ぼくのこの真つ暗な状況に光を差し込んだ。

しかし銃は正明とぼくに向けられていた。

ぼくを真つ暗な状況にまた引きずり込んだこの男は晁だった。

「た、晁？」

「ごめんね、海君。ぼくは君のこと気に入っていたけれどこの計画に失敗は許されないんだ。君は最後までぼくのこととはわからなかったのかな？もしかしてわかっていたけれどスルーしたのかな？まあ

いい。なあ正明君。君はこっちの世界に来るつもりはないのかい？」

「ないね」

いつの間にか銃を晁の方に向けている。

「そうか、じゃあ死ね」

パン

乾いた音があたり一面に響いた。

パン

「うっ」

銃口からのぼる煙。倒れる体。倒れたのは晁と正明どっちもだった。なにが起きたのか。

俺はわからなかった。晁は確かに正明を打った。でも正明は打たなかった。

目の端にはもう一つ動いた影があった。倒れていたはずの体が動いたのだ。

森本だった。かつての友人を今でも嫌いではないらしい。そんな体にした友人でもだ。

森本は昔の風貌とはかけ離れた黒髪に無精髭。もうその体に左足はない。さつき無くなってしまったのだろう。

「悪い・・・な晁。ここ・・・でお前に・・・は・・・死ん・・・でもら・・・う。俺は・・・お前の考・・・え・・・には賛・・・同・・・でき・・・ない」

息絶え絶えの声。その眼の先にはお腹を押さえる晁。そしてうつ伏せに倒れている正明。

ここで今正常に動けるのは俺だけだった。俺はこの状況からとにかく逃げたかった。死ぬはずだった自分の命がなぜか救われたことにびっくりしているがそれでも足は勝手に動いていた。

「おい、森本大丈夫か？」

「あ、ああ。川下は？」

「あいつは・・・」

あいつはそこで死んでるよ。さつき首折られてたから間違いはないだろう。

俺は首を察してくれと動かす。

それを見た森本は何も言わず起き上がろうとした。

無論起きれるはずがない。足が一本ないのだから。手を貸す。

俺らはこの場所をあとにした。正明と川下と晁が倒れている。これで終わった。

全て終わったのか・・・。

でも俺は晁の考えていることがいまだにわからなかった。

僕は大学生になった。僕と晁と森本と正明は同じ大学へ、川上はアメリカに留学した。

かといってなにが変わるわけでもなく特にこれっと言った出来事もなかった。

そう最初の頃は。

異変は僕らが大学二年生になった頃だった。

正明は相変わらずいい噂しか聞かない。でも最近妙な噂を聞くようになった。

ついに正明が女の子と付き合った。

内心僕は「ちつリア充め」なんて言っていたけど、いやほんとどうでもいい。いきがってるわけじゃなくてね。悔しくなんてないけどね。

問題はここからだ。

その付き合った彼女のことを調べてみた結果（正明のことを調べる過程のことであって決してやましいことや彼女さんが可愛いからという理由ではなくてですね）彼女さんの元彼はちよつとヤバめの人と発覚。しかもまだ未練たらたらときている。

僕の獲物は元彼さんには渡したくない。まあでも潰し合ってくれて最終的に僕が潰すっていうのもありだと思う。漁夫の利だね。

だから僕達はその元彼さんにアポを取った。電話で。めちゃくちゃ敵つい声の方で僕ら最初ビビりました。まじばないっす。

僕らは正明のことが嫌いという事、あなたに協力したいという事を告げたら会えることになった。

場所は元彼さんの、元彼さん達の溜まり場らしい。

そして僕らの目の前にその溜まり場（アパートの一室なのだが）の目の前にいる。

中からは笑い声がする。

僕はノックするために手を挙げこれ以上ないほどの心臓の鼓動を抑えながら覚悟を決めた。

13 (後書き)

忙しくてあまり書けません・・・どうしましょ

そこにいたのはタンクトップがはちきれんばかりのマツチヨ兄さんと、ひよろひよろのメガネかけたヤクチユー兄さんと、金髪オールバックのいけ好かない鼻ピアスの兄さんだった。

勿論このなんとか兄さんというのは僕の勝手な妄想であって戯言であり妄言であり諧謔を弄した結果、ようするに、世間一般でいう第一印象にあたるものである。なぜこんなにも回りくどく、当たり前前の事を一文字でも長く稼ごうとしているかというと、この地の文の長さだけ僕らと彼らの間に沈黙、牽制、興味、威嚇、脅え、思慮。6人いるわけだから6つの考えがあったわけでその長さ、重さに比例してなんとか無理矢理長くしたという訳である。

僕はこの空気が非常に嫌いなのである。

ただその間ま実際にはそこまで長くはない。

わかったのは友好的ではなさ気で条件次第でその態度が変わるということだ。そのプレハブのような友情を築こうというのに、こちらには約一名、言われなくてもこのメンツ上森本さんしかそのようなことをする人はいないのだが、今にもキスしそうな勢いでガンを鼻ピー兄さんにつけている。

本当に勘弁していただきたい。

「てめえ何しに来た？」

「用件はもう言っているだろうが」

「そんなん聞いてねえんだよ」

「じゃあ何聞いてんだコラ」

とまあ、はたから見れば非常に馬鹿な会話をしているようにしか見えない。森本に関しては当たり前前のことを素で聞いているのだが、鼻ピー兄さんは威嚇のつもりのセリフを見事に受け流されたらしく

今にもブチッって音が聞こえそうなほどの形相である。
とてもこの先不安である。

「やあ、よく来てくれたね。歓迎するよ」

とマツチヨ兄さんが言ってくれたおかげで僕の意識は馬鹿二人から逸れた。

「いやこちらこそ話に乗ってくれてありがとうございます」

「ははは。面白いこと言うね。まだ俺たちは乗ってはいないぞ」

「でも乗ることになると思いますよ」

「きつとそうだろうね」

「あつ僕の名前は・・・海と呼んでください」

本名を名乗ろうか迷ったが、一応念のため下の名前を名乗ることにした。

「俺はじゃあ 仁じんと呼んでくれ」

ほうほう。まっちょ兄さんはもしかしたら頭は良い方なのかもしれない。はたまた何も考えていないかどちらかだろう。

「で、こいつが晁であいつは・・・馬鹿でいいです」

すると聞いていなかったはずの森本がガンつけている形相のまま振り向き「大和だ」と叫んだあと何事もなかったかのようににらみ合いに戻っていた。

僕はしょうがないので「大和らしいです」というと仁は「血の氣の多いやつだなあ」と苦笑いした。

仁曰く、ヤクチュー兄さんは鷹たか、鼻かすピー兄さんは和かすらしい。

そして僕らは仁から話を聞いた。

僕はてつきり仁がリーダーだと思っていたのだがそうではなくもう一人ここにはいない奴がいるらしい。

これは晁も意外だったらしくびっくりしてるような顔をしていた。名前はタツ。何でも付き合ったのは去年の事で、一ヶ月もしないうちに別れたらしい。いやこの言い方だと仁から言われたことと少し違うので語弊を招くだろう。別れたのは彼女の方で、タツはまだ別れていない。いやこれも違うか……。彼女の方は付き合ってもいない、そしてタツは付き合ってもいない。要するに彼、彼女の間には何もなかった。ただのストーカーである。

なんだ。拍子抜けである。拍子抜けというのはちょっと違うかも知れない。なんとというか脱力。この感覚には脱力がふさわしいだろう。タツ自身の情報に関して聞いてみると仁は「人の話は半分に。タツの話は四分の一に」とだけ言ってそれ以上はなにも語らなかった。僕らの事情もほんとにざっくりと、大雑把に教えて僕らは帰路にいた。ちなみに帰る際森本と和は仲良くなっていて二人でゲームをしていた。雨降って地固まるとは言うけどもさ……。

「なあ、さっきの『人の話は半分に。タツの話は四分の一に』ってどういうことだろうな」

気になったので晁に聞いてみると意外にも簡単に答えは出た。

「そのまんまなんじゃね」

まあそうだろうけどもさ。僕はその理由が知りたいのだけでも。

「まあそれは会ってみればわかるんじゃないかな」

結論。僕らは今路頭に迷っている。本来の目的から遠ざかり、大学

生活をエンジョイするわけでもなく僕らは本当に何をやっているの
だろうか。

「ちょっと、いいかな」

ふと顔をあげると僕らの前に人が立っていた。

夕陽をバックにしているので誰かはわからない。

でも・・・

こいつは危ない。

直感は当たった。

俺の彼女はいつも笑顔だ。

常に笑って、常に周りを笑わせ、常に美しく、常に優しく、常に輝かしく、常に知性的で、常に冷静、常に空気を読み、常に友達のためを思い、常に俺を立ててくれる。常に彼女は完璧で、理想的で、魅力的だった。

俺らが付き合うのに時間はいらなかった。

でも、

でも最近。

彼女はつらそうな顔をしている。

理由を聞くと「なんでもない」。笑わせようとすると「ごめんね」。一緒になって悩もうとすると「気にしないで」。

俺は正直彼女の心がわからない。

でも確かなのは彼女が決まってバツ悪そうに、機嫌悪そうに、思い悩んでる風に見えるのは携帯電話を使用した時だ。

時にメール。時に電話。

彼女は「家庭の事情だ」とか言われて踏み込めない。

俺ら付き合ってるんだよ。俺と悩みを共有したっていいんじゃないか？

だから俺は独断で動く。

木村正明は性格も顔もその他もろもろ良い。

それが世間の目。

でもそれは表の俺。

俺はいい奴なんかじゃない。

と思っっている。

そもそもいい奴ってなんだ？いい奴の定義ってなんだ？

俺は自己中だ。俺は困ってる人を助けている自分が好きだけなん

だ。

それでも俺はいい奴なのか？

世間の目は容赦がない。でも今のところ、今のところはまだ俺に不自由になる状況ではない。

俺はいい奴だ。俺のすることは正しい。

俺は正義だ。

彼女の陰に男がいることがわかったのは動いてから3日もたっていないかった。

俺はなんだかわからない男が憎い。

女を困らせるのは『悪』だ。

「君たちは味方なのかい？それとも違うのかい？」

僕らの前に現れた男。服をだらしなく、言葉使いも髪型も立ち方も秀逸気も何から何までだらしが無い。それとは対照に顔は整っておりさっぱりとした印象だ。

「君たちは仁とあっていた人達だよ。ふーん・面白そうだね。君らは全員が考えていることが違って」

僕らを見透かしたかのように言う。その顔には笑顔。やわらかいではあるのだが芯は冷たい。

それにしても考えていることが違うか・・・

「まあいい。で君達は仲間のかな？」

「・・・お前は誰だ？」

「んあ？俺か？なんだろうな。仁は俺のこと紹介するとしたらタカかな？うん。たぶんタカだな。ちなみに俺のことなんて聞いている？」

「・・・タカなんじゃないか？」

「そうか。じゃあタカで」

タカは僕らを値踏みするように見た。それからうんうんってニコニコと頷き、そして「まず邪魔な集団を潰すのを手伝ってくれない」と僕らの目的と遠くかけ離れたことを頼んできた。

「いや・・・あ、どういうこと？」

「どういうことって文字通り潰すのを手伝うんだよ。いやあくなんていうかね、邪魔な奴らがいるんだよ。君たちの目的は知らんし知りたくもないし。それなら俺が知りたい感じしてくれればいいんじゃないかなってね。どよ？良いんじゃない？そのためにまずは君たちで一つ潰してみてくれない？どうせ君たちそういう感じのタイプでしょ。見た感じ喧嘩とか強そうだし、一人規格外もいるみたいだしね」

規格外とは誰のことだろうか？僕の、俺のことを見ただけでわかっ

たのかもしれない。し、そうじゃないのかもしれない。んなことはどうでもいい。今はそんなことは問題じゃない。

集団を潰せという無理難題。

僕らにどうしろというのだろうか。

僕らはまだ大学上がったばかりの一年青年。

どう対処しろと言うのか？

「いいんじゃないか？やってみようよ」

晁が口を開いた。僕は口が開いてしまった。森本は・・・何も考えていないようだった。

「いや、でも・・・」

「大丈夫。勝算はある」

「いやあすごいねえ。相手の集団の情報も聞いていないのに勝算があるなんて笑っちゃうね。いやあ傑作。面白い。面白いよ君たち。

あはは。それでこそ、それでこそだよ。情報は仁から聞いてくれ。期限も決めとこうか。そうだな、今から2週間後でいいんじゃないかな。そう考えると君らの中の規格外がどこまで躍進してくれることを期待して。んじゃあね」

タカはそう言つとゆらりくらりと僕らの横を通り過ぎどこかに行ってしまった。

僕らは協力することになってしまった。タカとこのタイミングで会う事は必然だったのかもしれない。し、偶然だったのかもしれない。依頼されたのは気まぐれだったのかもしれない。し、計画だったのかもしれない。いかんせん、ここからが問題である。

僕らは後戻りができない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2782w/>

悪のヒーロー

2011年11月29日23時54分発行